

# 真宗の道德観

第二世宗主著

## はしがき

我々の生命が様々な姿をして、思い思いの群をなし、数々の舞台を演じてきた愛さるべき此の地球・・・。

忘れ得ぬ思い出が過去の玉手箱の中にギッシリ詰めこめられて、いつも新しい記憶としてよみがへってくる。

その生命の劇場の舞台とも たとうべき現在の地球はいかにして誕生し、いかなる姿をしているのであろうか。

私は、ヴェルズ氏の文化史大系の中より、ホンの少しばかり資料を拾って新しき想いの一助にしたいと思う。

文化史大系第一章六項には次のようにかいてある。

(乃至 著作権問題)

小さくまとめて換言するならば、生命発生の時代は今を去ること遙かに六百万年以上にさかのぼり、

その後、人類発生の曙時代が訪れ（四十万年以前に）直立猿人が誕生して、当時の地上を大いに賑わしたことであろうが、

それから氷河時代は訪れ、いくたの悲しい人生を展開しつつ自然淘汰・適者残在

という自然のふるい分けが各々の時代に行われ、

第四回目の氷河時代の去った後、近代人に酷似しているネアンデルタール人が登場してたが、絶滅して新石器時代が訪れて現代におよんでいるのである。

私は今、人生劇場の舞台である地球の歴史を紹介してみたのであるが、

一体、地球の容積はいくらあるかという  
と、太陽は地球の約百二十五万倍である  
というから、

逆に太陽の約百二十五万分の一という計算になる。

又これを直径の上からたとえてみると、地球を、直径が一寸の球とすれば太陽の直径は九尺となり、丁度四畳半の室にギッシリつまる割合となる。

又、地球の直径をいうと約三千二百里であって、陸地と海洋とから成り立ち、高いところでも五千米にみたぬものが多く、海洋の低いところでも二里半足らずでしかない。

又、空気が薄い衣で地球の表面を包んでいる、

これを大気層と呼ぶのであるが、八里も上へ昇ると全く空気が無くなってしまおうと云うのである。

南米のアンデス山に住む猛鳥コンドルは、一里二十丁までの上空へ昇ることが出来、現在は高層圏用の飛行機があるが普通の飛行機では、約二里位までしか昇って行かない相である。

考えてみると、その大昔、赤熱の太陽から分かれて広大な地球の只中へ誕生したダストに似た小さな我が地球は、

千古の謎を包んで今尚、何事かを我等の眼前でかたり、何事かを我が耳元で囁いているのである。

それは深刻な人生観及び道德観の生きた  
バックとしてである。

千古の謎をひめている天空と地上に進化  
と淘汰という自然の力に乘じさせられ  
て、

或時は苦しみ、或時はあがきながらも生  
きる希望の火は燃え続け、久しく思索も  
し、強く行動もして、

しかも雑然たる原始の荒野にいどみて、汗  
と垢とにまみれ切りつつ麗しい文化の理  
想郷をつくり上げんものと、

血のにじむ如き努力を拂ってきた我等の  
祖先は、

人と人との関係と、人と社会との関係にかかわっている道徳を生産してきたのである。

原始時代について考えてみると、初めは子供同志の間によくみるような一つの約束が夫婦同志の間に結ばれ、そしてそれが血族の間に及ぼされ、同じ種族の仲間同志の間に結ばれたことであろう。

そしてその場合、腕力の強い者が征服者として大勢の弱き者を従わせ、この両者の間に何等かの約束が結ばれていたことであろうし、若しその約束を破った時は、それに価する制裁が加えられたことであろう。

次の時代になると財力の豊かな者のが貧しき者を征服して、  
両者の間に又、新しき約束が結ばれ、

次の時代が訪れると頭脳の優れた者が仲間同志から撰び出されて一般人を統御し、  
そこにも又、新しき約束が結ばれて一つの社会秩序が作られる。

その後の時代には頭脳よりも徳のある者が撰び出されたり、  
或時は徳と智能のある者が統御者として登場したり、



或時には再び原始時代のように腕力的行為で相手国を侵略したりする、いわゆる**武力政策**がとられて軍国主義的な法律が約束されたり、  
千差万態の姿となるのである。

そして始めの約束は仲間同志が安楽な日暮らしをするためのものであったが、  
交通が漸くひらけかかると他の種族のために迫害をされたり侵略されたりする為に、

これを守りふせごうとして新しき約束が同志間に結ばれ、

しいては他の種族を侵して自らの種族の繁栄を計ろうとしての約束も出来ると  
言った有様である。

私は今、文化史大系の中から原始人と呼ばれる者の原始的生活の一節をウオアシントン・スミス氏の語から引いてみようと思う。

原始人の居住している場所は、まづ川の近くであり、白亜の断崖の遠からぬ所である。

それは、彼等原始人達は水かめやその他の器具などをもっていないからであって、常に水が絶えないようにするためである。

そして彼等はいつも白亜の断崖の洞穴の中で暮らしているのであるが、彼等はこの時に火打ち石をもっていたのである。

火が欲しい時は火打ち石と黄鉄鉱の破片とを乾いた枯葉の中で、カチカチと切り合したもののらしい。

原始人たちは白亜の洞穴の中へ羊歯や苔や、其の他乾いたものを敷き藁として、その中にうずくまっていた。

その中でも或る一部の女や子供たちは絶えず薪を集めて火をたやさぬようにしていた。

これが伝統となって幼者は大人たちの仕事の真似をする。

又、陣屋の側には枝を積み重ねた粗末な風よけもあったらしい。

この群の父であり主人であり長老である者は火の傍らで火打ち石を割ることに忙し

く、子供たちは長老の真似をしたり石器の使い方を稽古している。

女達は火打ち石を採りに行き、棒で白亜の層の中から掻き取って陣屋へもってくる。

原始人は極めて早くから獣皮を用うることに慣れていたらしく、皮で子供を包めみ、或いは地面が湿って冷たい時は敷物に用いた。

家族の他の者は囲炉裏の場所から外へ出て食物を探しにぶらついたたりして、夜になると皆帰って火の囲りに集まり火をかきたてて焰をあげる。

これは、この辺を荒らしあるく熊や其他の猛獣に対する防御でもあったらしい。

さて、この小さい家族の群の中で本当の成人した男は長老一人である。

女や男の子、女の子がいるが、男の子が成長して長老の嫉妬を引きおこす頃になると、

長老はこれに喧嘩を吹きかけて追放するか殺してしまう。

女の子が、この追放人と一所に出て行くこともあったろう。

さもない時は、二三人若者は漸らくの間、一所に放浪しているが、そのうちに他の家族の群にあって、その中から配偶者を盗み出す事もある。

するともう若者達はめいめいに離れて家族を造る。

かくして新しい家族が出来、長老となるが、そのうち長老も歳が四十にも、又その上にもなり歯が欠け精力が衰えると、若い男が立って彼を殺し代わって群を支配する。

この時、陣の近所で老人たちの為に簡単な原始的な贖罪の儀式が行われたものであろう。

体力の衰えかかった、気むずかしくなってきた老人には、苦難と死が見舞ってくるのである。

それから長い年月は流れ、いくたの苦難をへて新石器時代に入ってようやく文化生活の曙が訪れたのである。

もうこの頃は湖上に家を作り、あざやかな集団生活を営んでいたのである。

むろんそこには博愛・平等・自由・正義・平和といった道德意識は今日程、明瞭でなかったし、極めて狭いものでもあった筈である。

しかし、朦朧とした意識はあったようである。

そしてそれらは全く他律的（刹那的な外からの刺激によって反射的に動いているというだけではあるが）朦朧とした道德意識は、農耕時代を経て現代に及ぶに至って明瞭とはなったのであるが、

知ることと行うことの不合理的という矛盾の間にはさまれて、或者は原始的な自然主義に走ろうとし、或者は表面のみを、かいつくろって、いかにも末通った実行ができていくかの如くみせかけ、或者は

いわゆる諦めを主張するといった調子である。

道徳は、あらゆる学問・芸術・事業・等の生活社会に於いて、最も権威のあるものであって、

これのない生活は盲目であり、墮落であることは道理であるまいか。

私は今までザーッと人類の発生の歴史をひもといてきた。

道徳の問題とは全く関係のないことのようにあるが、おそいきたる氷河と獣と争い乍ら、**適者生存**の努力を拂いきたったわが人類の祖先たちは、始終一貫して道徳意識をたもちきたったのであるから、



私の著書を見る人も又、私の話をきく人も、人間の問題の上に何かを考えさせられたことと思うのである。

私は先ず始めに世間一般の道徳に就いて述べ、

次には宗教・・・特に真宗という立場に立って他の道徳の比較をし、終には真宗独自の道徳観を述べて小編を結ぼうと思うのである。

## 第一章 道徳論

### Ⅰ。道徳の意義

【正しき信仰より発露されざる道徳行為  
は人をあやまらせる】

「道徳」は英語でMo-ral-lyモラールであつて、その内容は徳義的に・道徳上・徳性上・行い正しく・端正に・真に・実際に・の七つの意味を持っているのである。

この意味から次の定義を引き出すとすれば、

「道徳」とは人は万物の霊長であるから、その霊長らしき行いをしなければならぬ。

道徳法はそのための道であり指針でもある。

と、こうなるのである。

従って何程、文化生活を営んでいると威張っても精神的に人間の誇りを自覚し、精神的に生きねば、それは、人面獣心的な野蛮人であろう。

「精神的に生きる」という意味は、博愛と平等と自由と平和と正義と犠牲と禁欲と寛容と勤勉と叡智とをみにつけ、しかも身にこれを行う事である。

博愛心の良さは、自分より幼き者や可弱き者、貧しき者に対しての同情と施しと援護である。佛教では「慈心ニシテ殺サズ」の行いである。

次に**平等**の良さは、独り善がりか、若しくは極少数の者を善くする為に争うことや、

いたづらに自己の立場を固執して他の者を排斥するようなことではなく、

飽くまで大きく総てを尊敬し、かつ抱擁して差別なく共に栄えて行こうとするもので、佛教での「**平等化**」の行いと教えるのである。

次が**自由**であるが、意志の自由を所有している人間は、他からの強制などによってする行いは不愉快である。

自発的にするは、いかなる困難な行いでも愉快なものである。

それは人の本心が他の方からくる束縛と、その不自由さを嫌うからである。

これは佛教では「**自策自励**」を以て教えている。

次が**平和**である。お互いが不満も不服もなく闘争もない和合の世界である。

佛教では「**和合衆**」とこれを説くのである。

次は**正義**である。万物の霊長は霊長らしくふるまはねばならぬ。これが正義である。

この大きな正義の観念から小さな正義がひきだされるのである。佛教では「**正見**」といている。

次は、犠牲である。私の利益をすてて公のために盡すことであって佛教では「布施の行」という。

次は禁欲である。名誉・財産・飲食物・異性・休養（娯楽）などを禁止することで、佛教では「断惑・若くは持戒の行」というのである。

次は、寛容である。これは決して腹を立てないことと。

いかなる不愉快な事に対しても少しも嫌な思いをしないでこれに奉仕をする行であって、

佛教では「忍辱の行」に当るのである。

次が**勤勉**である。これは真善美の価値を倦まず求め、これを身につけ、心を磨くことに脇目もふらない行いであって、  
佛教ではこれを「**精進の行**」というのである。

次が**叡智**であるが、これはあくまで理智的であらねばならぬことである。佛教では「**智恵の行**」というのである。

さて、人間が人間らしい行いをする姿が**十善**であって、これを小さくまとめて**五倫の行**というのである。**五倫**とは**仁愛・義務・礼儀・勉学・信念**である。

そしてこれらは人格の属性である品性の上  
に現れるべき徳の姿で、この品性が働いた  
のを品行をいうのである。

## 2。二つの流れ方

さて昔からといっても、文化意識が芽を  
だして

人類が文化生活を明瞭に営みかけてか  
ら————道徳のあり方について二つ  
の相が歴史上へ、クッキリと影を投げて  
いるのである。

二つとは



理性にのみ頼って完全な行いをやるとして  
本能を邪魔扱いにする流れと、  
これと全く逆に、理性を抹殺して本能欲  
を満して行くことが正しいと主張する者  
とである。

前の方の主張はアイデアリズムで現実的  
な生活を否定し、  
遙なる理想の未来へ思いを走らせる思想  
となるから、  
禁欲的であり、厭世的でもある。

ギリシャ古代に於いてはストア学派の主  
張したところであり、キリスト教でもカト  
リック教は、その著しき特長をもち、

佛教でも小乗佛教などは灰身滅智を標榜するから極端な厭世主義となるのである。

近代及現代をみるならば知識層——インテリ層は概ね禁欲主義であり、  
理性的人間観を強くもっていることである。

次に後の方の主張であるが、  
これはリヤリズムで全く反対の立場に  
立って  
彼等、理想主義者の群が理性第一主義を  
唱えるのに反して、  
これは本能第一主義を唱え本能を重くみる。

そして殊に、情の世界を強調し、恋愛第一主義などと唱える者や、自然に名を借りて本能的欲望の動くままに行うのが自然的な生活であるといつて、享楽思想を鼓吹するのである。

ミル（英人）氏の功利的がこれであり、ロマンローラン氏の自然もやはりこれをいっているのである。

扱てこの両説を味わってみると、アイデアリズムの一派は唯心論の上に立つて忍苦と犠牲の人生を尊いもの、おごりかなものと教え、こうした教えに順って行かれる人こそ真の勇者で人生の勝利者であると賞讃するのである。

リアリズム一派は享楽と放従の人生を尊  
いものとして教え、これを行いうるもの  
は自然であるというのである。

そして自然の姿こそ人たる姿であると  
主張するのである。

今、これを批判してその両者の長短をわ  
きまえてみるならば、

アイデアリズムの方は、きわめて冷酷な  
る道德観であり、不可能な道德法であるとい  
えよう。

それは不完全なる凡夫においてである。

我々は、一時たりとも現実という地上から一厘も否、一毛も離れては存在し得ないのである。

だから理想第一主義をいくら高らかに叫んでも、

それは一つの空声であり、インテリーの負け惜しみの悲鳴でしかないのであって、まして実行という面にいたっては支離滅裂の惨状であることは歴史のよく教えているところである。

インテリーや、偽インテリーはいたずらに本能的な現実から逃げさけんとして理智的な事柄を好むけれども、

それは人間性の破壊工作であり悲劇のレビューである。

彼等は自分を反省しているつもりで何等の反省もしてはいないのである。

だから自分の場合を除いて以外の他の人に対してアイデオリズム的な行為を強要し、

これが出来得ない時は遠慮会釈なく無慈悲にもむち打つものである。

社会の人々は、こうした人間愛のない理性的独善のムチに怖れて、

ついに偽善のヴェールをかぶり窓口外交の御世辞をふり廻らすのである。

理性独善のモラルは、ニイチェがかつて云ったように青白きモラルである。

呼吸しているミイラを作る方法でしかない。角を矯めて牛を殺して仕舞う愚かさである。

では、リアリズムはどうか——これも実にけしからん考え方である。

なぜなら唯物論の上に立って本能の無制限の欲望を充塞させようとしているのであるが、

限られた人間の肉体は逆に、しかも加速度的に消耗して衰えはてて行くことである。

そして本能は盲目である。目的らしいものも何ももちあはせてはいない。

全く反射的であり衝動的である。

盲目的な本能の意欲をみたされたと仮定  
してみても、決して自らの為に幸福ではな  
い。

むしろ不幸を招くことであろう。

それこそ飼い犬に手を噛まれるような結  
果となるだろう。

試みに今日一日、本能の好むままに行っ  
てみたがよい。

いかなる結果が生まれてくるか。

そこには秩序もなければ静けさもない。

それは爛れ切った刹那的な快楽があるこ  
とであろう。

そしてその行為の後には、冷水をかけら  
れるような冷やかと、底知れぬ地底へお  
ちて行くような淋しさ、頼りなさとの  
こるであろう。



それこそ、前の呼吸するミイラに対応して、これは又、火だるまの人形とでも喩うべきであろう。

私は従来の道徳法が快楽説と国権説、そして神権説に重点を置いて各々しのぎを削りあっていた時代を知ると共に、その間において良心説が頭をあげてきて、ついに客観的な法律や規則に従うまでもなく、自主的に自身の内方にある良心の命令に従って行くべきであることを教えてくれたことを感謝する。

しかし乍ら、これ又明らかなる対立であって快楽説は本能の上に立てられ、良心説は理性の上に立てられているのであるか

ら、これ又一つの偏執といはねばならぬ  
のであるまいかと思う。

### 3。正しき道德観は

私は正しき道德観を提案する。

それは今までの道德観が余りにも片より  
過ぎているからであって、

理性も本能も共に天からの授けられた賜  
物ではないか。

宇宙意志の理想化した姿が理性と本能で  
はなかったか。

或る青年は私にこういった。先生、一人間が知識を求める強い欲求を持っていると同じように、我々の本能も又、性欲と食欲との二大本能をもって居りますが、どちらも天与の賜物であつたら知識の旺盛な者を偉人だとほめて、人間仲間の上級のものとし、性欲や食欲の旺盛な者を豚扱いにするというのは、一寸腑におちません社、と不審がったのである。

成る程、一応もっともな考え方である。しかし、宇宙の意志は、その理想化の際、先ず地上へ本能として下生せしめたのであって、

この下生した本能は強い力はあるけれども盲目であるが為に、

その目となって働く理性を下生せしめ、ここに正しい目と強い足とが揃ったのであるが、

これがもっともよく、しかも程よく、どちらの方も五分五分に働いているのが人間である。

先の青年が云った知識欲は理性の働きであり、

これには理想があるから実行の力は弱くともこれを賞揚するのは当然なことである。

これにひき替えて彼の本能は、盲目的であるから何をしてかすか判らぬというので、下等扱いにするまでの事である。

もし、性慾にも食慾にも理智の光りが奥底に輝いているとしたならば、決して道を誤らないであろう。

性慾は正しいルートに乗って反って人を元気づけ、

人としての大きな仕事をやらせるべく激励してくれるであろう。食慾もそうである。

一体に青白きモラル患者たちは、一概に性慾や食慾を汚らわしがる態度に出たがるのであるが、これは反って下心地のある実に鼻もちならぬ潔癖家であるか、

或は不具者かのどちらかである。

しかし、そうかといって何でもムキ出しは  
気持ちのよいものではない。

清潔な理智のうすべールを通してこれを  
みるべきものであり、もちうべきである。

唯心論とか唯物論とかは、はたして地上  
に存在しうるものであろうか。

総てが相対性を帯びているものでないの  
か。

心と物・・・この二つを正しいルートに  
乗せる法則は**実相**である。

実相とは大宇宙の意志から放射される十  
如是の法則原理である。

ゲーテは、ファストの中の詩に次の言葉を書いている。

”ああ、我が小さな胸のうちに二つの霊共が住んでいる。

一つの霊の方は高き霊共がいる はるかなる空の彼方へ無理無態に飛び去らんとしている

もう一つの霊は蛸の足みたいな手で地上へしっかりへばりついて離れようともしない

ああ我が二つの霊は つねに悩む” と。

二つの霊、それは理性と本能とである。

若し道徳行為が正しく定らぬとせば、いつもいつも行為の基盤がぐらついている筈である。

朝には理性的であって夕には本能的である  
といった具合であろう。

これを物質的な方面と精神的な方面との  
両方から考えるならば、

朝は精神的に生きんとして努力し、

夕にはいつしかこれが反対となって物質  
的に生きんとする。

というのである。

朝の方は「武士は喰ねど高楊枝」の態度  
であり、夕の方は「花より団子」の態度  
となるというのである。

私は強調したい。それは**理性意欲と本能  
意欲とのマッチ**である。

即ち本能の中へ理性が宿り通って、

本能の人生に存在する目的は、唯一つ、



宇宙の理想（ニイチェはこれを至高善と呼び、パスカルは神と呼ぶものである）を実現すべき為であり、理性はこの本能をいたわって本能を正しくリードして行くべく働くものでなくてはならぬと云うのである。

いいかえると、理性も本能も共に協力して宇宙の大理想を地上に実現して行くべきことが本当の道徳であると云うのである。

もし、これが実現できるならば我々の本能は強い我執を離れて、理想実現のために素直な、そして勇しい、かざらない、根強い本来の姿に立ち帰るであろうし、

理性も又、片狭な考え方を捨てて冷厳な  
智力と慈愛にみちた包擁力とをとりかえ  
して、温かく本能をかばうことであろう。

この境地こそ空海の作った、いろは文字  
の第四句に

「浅き夢みし酔ひもせず」とある意味に  
当り、寂滅為楽の妙境界ともいはれ、  
又、孔子のいったと伝えられる

「我が侂にふるまへどもノリをこえず」  
の境地ともいえるのである。

この道理を初等算数の公式で出せば

真の道徳 = (理性の執れ-執れ) + (本能  
の執れ-執れ) ÷ 2 + 十大理想となるろう。

私は前の所で、道徳は人格の属性である品性の陶冶であると云った。

しかしどんなに品性の陶冶をやっても、人格そのものが正しく目覚めなくては駄目なものである。

たとえば

庭にある竹林をたやそうとして、竹を伐りとったとしても、その根が残っているのでは又竹林になるようなものである。

どんなに巧みに品行が正しくみえても、それは三日坊主でしかない。

なぜならその人の人格そのものが陶冶されていないからである。そ

れでは人格の陶冶ができれば品性の良さが現れるか、と云うと、神ならぬ人の身で

あるから、様々の過去の悪習慣とか、  
切っても切られぬ宿世の業因（運命のつ  
ながり）がかかわれているのであるから、  
仲々思うようにはならぬが、しかし相当  
な徳は現れる筈で、  
先ず最初は自己の反省から始められ、そ  
の渦巻は次第に拡大され、かつ深められ  
て行くことである。

そしてここから計らいのない自然の姿とし  
て善の行為が次第に強く放射されて行く  
のである。

そうしてみたら、枝葉末節の姿に捕はれ  
ることをやめて、勇気一杯で人格の改善  
という峰へ昇り行くべきでないか。

そして再び現実へ還ってくるのが正しい  
道徳行為と思う。

そこにはゴマ化しも争いもなく、真に調  
和された行の世界が展開されるものであること  
を知らねばならぬ。

## 第二章

### 1。宗教と道徳に就いて

道徳は知る事と行う事が一致していなけ  
ればならぬ。

しかし昔から「言うは易く行はかたし」  
とあって、悲観的な道徳を無理矢理に押し  
つけられてきたので、

釈尊も「先人祖父マタ道德を識ラズ ウ  
タタ父ノ余セル教令ヲ承用ス」と説かれ  
ていられる。

道德は実行がともなわなくてはならぬ。  
その実行はモーゼの十戒であり、佛教の  
十善であり六波羅密の行でもある。

そしてこれらは一朝一夕に行いうるもので  
はないのである。

たとへそれが行い得られたとしても、そ  
れは人の品性の陶冶というだけの面で、人  
格の陶冶を取り扱はないのである。

しかし最近は竿頭一步を進めて人格の問  
題までに及んできて、

自我の実現と自己の統一、自由意志の開発、そして義務と責任の遂行をやろうとして努力しているようであるが、お題目だけは高らかにあがっていて、さっぱり実績があがらぬようである。

全体、その方法に於いて教訓めいた箇条書きを他律的な人間が実行し得ると考える事自体がおこがましいのであるまいか。

しかし人は万物の霊長であるという前提のもとに道德の対象となった者は、完全な、自律性の強い理性的な人間なのであるから・・・

そう考えると、ころからこそ御説教式な訓戒教育が始まったのであるから、こうした仮設の世界（机上）では可能なことかも知れないが、実際の上では失望のほかはないのである。

ではいかにして他律的な人間をすすめて道徳を行わしめるか・・・・・

それは、こうした人の内面へ、こうした人の道徳性をひきおこすべき”自律性なる力”を植えつけるより途はないのである。

この力が植えつけられると、内なる力は彼をすすめて必ずや道徳的な行為を行はしめるようにするであろう。



これはカントの道徳哲学原論やフヒティ  
の新教育法や、  
理性的宗教界のホープである真宗の「念  
佛の法則」等にまたねばならぬのであ  
る。

道徳も早やここまで来ると理性的傾向の  
宗教となるのであって、一般的な道徳とは  
本末の関係を生ずることになるのであ  
る。

世間の人々は口で善悪の事をいい、ここ  
ろでそれをあれこれと批判はするが、  
決して基本的な知識をもっているのではな  
い。

只、世間の因襲を、そのなり受け継ぎ、  
而もこれをその時々<sup>の</sup>感情の浪にもてあ  
そんで、投げ売りをしている程度しかない  
のである。

いつもその批判をすべき定規が狂っている  
のである。

だからこそ聖徳太子は「世間ハコレ虚  
偽」と云われ、

聖シンランは「ヨロズノコト、ミナモッ  
テ、イツワリ タワゴト マコトアルコ  
トナシ」と喝破されたのである。

また彼れは本典信卷別序に、「人倫ノ弄  
言ニハジズ」とも述べ、その帖外和讃に

は、「善悪ノ字知り顔ハ、オホソラゴト  
ノカタチナリ」とも告白し、  
又、「シカルニ洛都ノ儒林、行ニマドッ  
テ邪正ノ道路ヲワキマフルコトナシ」と  
も義憤されたのである。

ここで私は強く叫びたい。

「一体、世の人々は永恆不滅なる正しき  
道徳の規準をもっているのか、も  
し、これがない時は必ずや自害害彼 彼  
此俱害の惨劇を招くものである」と。

宗教にもいろいろあるが、ブッテーズムの上からいって道徳はどうあるべきか・・・・といえは、それは主産物ではなく副産物であり、フェースの側からは

その発露であり、一つの属性作用である  
と、吾、恩師が親しく聞かされたところ  
である。

いいかえると、道徳は宗教の補助役でも  
あり従者でもある。  
というのである。

何故なら真の宗教は自我の開発、即ちサ  
トリを与えることが根本問題であるし、  
この命題が大きな帰結を与えられてこ  
そ、  
人生に而も他の為に働く姿が道徳である  
と考えられるからで、

この前に若し道徳があると考えるならば、それは未だ仮設の地位にある仮定上の道徳であって、  
事実上のものとは言えないのであるまいか。

ブッテーズムには真諦・俗諦との両説があって、  
真諦は生死を離れて解脱を獲るための真理とし、  
俗諦は解脱し得た後に教化する方法で、

比叡山を開かれた伝教大師最澄の末法灯明記には

「ソレー如ニ範衛シテモツテ化ヲ流スモノハ法王。四海ニ光宅シテ以て風ニ乗ズ

ル者ハ仁王ナリ。乃至 真諦・俗諦タガイニヨリテ教ヲ弘ム。コノユエニ玄籍宇内ニミチ、嘉猶天下ニアフル。」

と示されて、真諦と俗諦とは第一義的の真理と、第二義的真理とに分かれていることを教えられたのである。

私は更に釈尊の御身の上や、聖シンランや蓮如上人や日蓮上人の身の上まで、佛教と道德のつながりを一べつしてみようと思う。

## 2。聖なる面影

先ず釈尊であるが、

この方が出家された事は、齡おいこまれた父王・浄飯を捨て、新婚の夢そぞろなる花の如き麗人・ヤユダラ妃を捨て去り、実子ラゴラと父子の情をたち切り、カピラボスト城の国民の信頼を裏切つて、月も凍らんとする二月中旬の夜半、王城を脱れれ苦行林の中に入られた若き貴族スナルダこそ釈尊と仰がれる人なのである。

彼は解脱し得てから再び故郷へ衣の袖をはためかしつつ帰り、父や妻や子及び国民のために広く不朽の財産を施し恵み真の道徳を行ったのである。

もし、旦に一般的な道徳の上からこれを見るならば、釈迦という人は何というむ

ごい目をさせる人であろうかと思うに違いないであろう。

ここにも宗教は道徳を超越していることが知られる筈である。

次が**聖シンラン**の場合であるが、彼は流刑の時から家庭の解消を再三やらねばならぬ破目に出あって、しかも子供たちは皆、散り散りとなってシンラン御自身も六十五才の歳、二十年も住みなれた常陸の吹雪谷の草庵で、妻恵信尼と分れて帰京の都に就いたのである。

歴史家の話によれば流刑前の妻は離別の止むなき事情のために別れて配所国府へ趣き、非公式ではあったが京から先妻が



見舞いに来たということに表向きはつくろって別の夫人と縁を結び、しばらく同棲したのであるが、

これは病気のために生き別れしたか死別したかである。

そしてその次に迎えたのが今の恵信尼その人であるというのである。

某師は「シンラン聖人が権者である以上、妻などたびたび迎えなくても我慢ができぬ筈はない」といっているが、それは現人神（あらひとがみ）的な狭い見方であるというべきである。

シンランに最後までつかえた彼れ恵信尼は、

口伝鈔や其の他の遺書についてみると、  
実に信仰的な深い素養のもち主であった  
ことが知られ、  
殊に夫君であるシンランを権者と仰いで  
恭敬尊重して奉仕し協力した内助の功績  
はおうべきもないのである。

しかし、シンランの悲しくも痛々しい人  
生行路を心ない無慈悲な人々は何とみるで  
あろうか、  
恐らくはナマ臭坊主位にしか見られない  
であろうし、

「法は信じてさしつかえないが、人は信  
じていけない危険だから」  
などと嘯し立てたことであろう。

今尚、そう云う人がどこかに居ないであろうか。

聖シンランは、こうした苦難の行路を歩みつつ偉大なる庶民の宗教を次ぎ次ぎと築きあげていったのであった。

ここにも宗教は道徳を超越し、しかも明るき道徳をつくり出して行く姿が見受けられるではないか。

シンランが人間としての濃い影をありのままに地上へうつし出してこそ、そこに庶民の人々は、やすらかな胸を弾ませて、その分相應己が宗教を渴仰し、いかにこれに随喜したことであろうか。

私は次に日蓮上人の場合を考え合わせてみようと思う。

彼は鎌倉時代の中期の人と伝えられるが、封建的色彩の濃いその時代に四ヶの格言を立てて他宗を難じ、しかも立正安国論を幕府へ提出してその失政をなじった彼れであることは、道徳上、許し難いことといわねばならぬ。

しかし彼れは三十才の正月元旦、清澄山頂に登って海洋から昇りきたる日輪を拝し、初めて七字の玄題を唱え、しかも故郷なる阿波の国の方へ顔をむけて、親の孝養の為に玄題を高唱、久しくあったというのである。

次に蓮如上人の場合であるが、  
彼れの私的生活の中で一面、その時代相  
の反映とはいへ、淫蕩的な破倫行為とさ  
れて、青白きインテリーどもの噂の種を  
播いたのであるが、  
事実上、彼には二十四人の子供があり、  
内縁を結んだ婦人も六、七人いるとい  
うのである。

そしてその多くは生存していたというので  
あるし、彼が八十四才の砌に末子が誕生  
していることも事実であるらしい。

この場合、蓮如自身は何を考え、何をや  
らんとされたのであろうか・・・・

世間の多くの人々は彼の性格を知る由も  
なく、ただ「淫蕩的な人」という烙印を

捺して、意義の世界から取り除いているらしいのであるが、一面に於いて彼程の才能や美事な識見を有しているインテリー宗教家の彼れを、一概にそんな眼でみるのは惨酷であるといわねばならぬ。

彼のそうした行為の奥には何かがあることとでなくてはならぬ。

私は、**蓮如**その人が旺盛なる精力家であったことは信じる。

それと同時にその粗野なる精力がフェースによりて利他救済という価値の顕現の為にふりむけられた事もうなづけられるのである。

それは、彼れの通ってきた足跡を歴史的に考え究めてである。

では彼れの破倫的行為は何からきているのであるか。

というに、

当時、彼れが何より悩んだのは法燈の断絶であった。

法燈の断絶といっても、本願寺の血族が絶えるという意味ではない。

フェースの本体である法の燈（ともしび）が断絶した時は、いか程巧みな教儀が宣布されていたとしても、それは一つの偶像であり、人形でしかないのである。

かかる形体は世間を毒するとも、決して利益はしないということを幼少な頃から、しみじみと体験していた彼れである。

そして苦心の結果、この途絶えた法の慧燈は彼れの内心奥深くに掲げられ、真宗再興の素意はここに一応成就をしたのであるが、これを子孫へ継承させることと、彼れの立てられた教団を直接まもり行く力としての血族信者や、その直弟子を彼れは肉親、ことに実子の中に獲ようとしたのであった。

法燈の継承は、その子供の中から器量人について厳撰し、他はこれを扶けて援助せしめようとする為の直系尊属を作るこであったらしい。彼れはこうした事に依って本願寺の経営を、恙なくやり通してきたのである。



その頃は、あたかも室町時代の中期に当り、十一年間にわたる応仁の乱の最中のすぎようとしていた頃で、京都市中の内裏・幕府を始め神社仏閣、民家の大方は焼失して、花の都は焼け野原と化した。この頃、幕臣、飯尾六左衛門は

汝や知る 都は野辺の夕雲雀（ゆうひばり）

あがるをみても 落つる涙は

と、歌った相である。

この歌を味わっても、いかにその頃の人  
心は淋しかったことかと推しはかられる  
はずである。

こうした中に人々は人生の安定を求めて  
倦むことを知らなかったのである。

彼れ蓮如上人に対抗して立った高田の真  
患上人の溜々たる雄弁よりは、

人として飾ることなく、而も貧乏のドン  
底から立ち上がって、

信念と燃ゆるフェースパッションと、透徹  
した理論とを以て捨身的行為に始終した  
蓮如その人を、

親の如く、愛人の如く、太陽の如く、真  
夏に於ける樹蔭の如く、泉の如く、しか

も大地の如く帰依もし敬慕もし、求めもしたことであろう。

彼は聖シンランと同じように宗教理想顕現の為に献身的であった。

しかも苦難と迫害と氷雨おそう嵐の中でこれに堪えぬいてきたのである。

むろんそうした蔭には、石人でない彼にもフェースを通しての慕情の人もあり、生死を共にしてきた内弟子や血族の一群があって、

ある時は励まし、或時は諫め、或時は慰めもして力づけをしてきたことであったようである。

破倫的な行為とみられる彼れの行為は偉大なレリジョン（宗教）のスフィンクスを築きあげたてではないか。

ここにも宗教が道徳を超越していることが明らかに証明されるのである。

その他、ギリシャのソクラテース氏や、ドイツの大哲学者カント氏、其の他一々例をあげたならば、枚挙にいとまない程であろう。

私はサンスクリットバイブル（梵語の聖書）や、其の他の仏典の中で、

恋情が仏法を教えたり、芸妓や娼婦がその情を通じて道心をおこさせたりしている事実が説かれてあって、

特に佛所行讚や、大莊嚴論経が煩惱即菩提を強くあらわしていることや、

馬鳴大士の妙伎楽・ライタワラには

「利」と「色」を説いてこれに執着すべきでないことを教えるのであるが、

それは逆に名と利によって道が獲られたことを教える結果となっているし、

土車という劇も婆山仙那という芸妓の愛慾を中心として

人を悩ませていた彼女は、心機一転してからその「色」によって逆に菩提の尊きみちを教えたという筋になっているのを見のがすことができない。

その他に強盗の転向者、生まれかわった正しい姿で過去の罪業を身を以て演じ、口を以て示して人々を感化した事や、

摩登伽経では、阿難・センダラの娘の間に咲いた、つつしまやかなロマンスは、二人をますます高い世界へ押し上げたことが、釈尊の指導によって明らかにされ、

宝積経の中では、愛作菩薩が恋慕の情を縁として城内の姫を浄化して菩提心を開発せしめた事を説くといった調子で、あの厳格な禁欲主義者とも考えられる釈尊が、佛説としてロマンスの世界を説か

れたことは、こころない人や、正しい眼のない人々を驚かせもし、疑はせもしたことであろう。

私は決して享楽思想を説く者ではない。  
そして別格に煩悩を奨励するのではない。  
しかし乍ら、現今の世間は余りにも極端な行き方をして或人は享楽主義を以て第一人者を気取り、或人は理想主義を掲げて正当なりと骨張し、  
ことに大乘佛教の極意ともみるべき煩悩即菩提・生死即涅槃の教義を反省することもなく、  
むしろ煩悩を邪魔扱いにして冷たい死のような美しい世界をもとめようとしている傾向が強く、

たまたま真面目に信仰に生きぬこうとする人々の枝葉末節に拘泥（こうでい）して、

その人の精気までも奪い去らんとする時代であるからこそ、思い切って人情の扉を押しあけ教義の威容にインタビューしようとするのである。

### 3。むすび

ブッテーズム……シンセクト（SHIN SECT）の教義は宇宙の法蔵願心を開発して自我の大改造をすることにあるし、この成長はやがて利他廻向の創造となって顕現することを教え、



これを開発し現行せしめる外的な条件となるものを**他力**と呼ぶ絶対的法則であり、その表象であるというのである。

こういう大事業を（一切の為に）荷なって完成しぬこうとする特別な位地に立たしめられた人々は一種の天才であり、ある意味の精神異状者でもあるから、常人の気づかない点も多くあることは従来  
の学説である。

兎もあれ、かかる偉大なるレリジヨンは世間的なモラルを凌駕し超越していることは事実であり、モラルは、その副産物の一部であるということになる。

真我の開発と現行ということを使命として立つ、かかる宗教の行為を妨害したり障害となったりするようなモラルは、人生上の吸血鬼でなくてはならぬ。

人を殺すのが道徳ではない。人を生かすものでなくてはならぬ。

樹の枝をもってきても、幹はついてこない。幹をもってくるもの、必ず枝を持ってくる。

道徳の行える者は、必ずしも宗教の信者ではない。宗教の信者は必ず道徳の遵法者でもあり、うるのである。

「末から本は出てこない。本から末は出るけれ共」と味わってみるべきでないか・・・・・・・・。

道徳は、善を好んで悪を憎しみ排斥する。

宗教は、善悪共に活用する・・・・・・・・

この差別を知らねばならぬ。

そして宗教の信仰から流れ出る道徳によって社会及び個々の人々が真の幸福を得なければならぬと御すすめて第二章を終わりたい。

【 完 】

## あとがき 【管長職】

第三章以下は、真宗の生命を弘願真宗御宗祖聖人の教義体型を以て、お勧めされて居られるため、直々の経説をお受けなされる事をお望みいたします。

弘願真宗管長拝

不許複製

所有者 弘願真宗総本山聖玄寺

住所 福井県福井市羽水1-303